

2. 研究の詳細

プロジェクト名	教員養成課程の学生のための国際共生教育に関する共同研究【継続】		
プロジェクト期間	平成24～25年度		
申請代表者 (所属講座等)	久保田裕子 (国語教育講座)	共同研究者 (所属講座等)	杉村孝夫(国語教育講座)、勝又隆(国語教育講座)、菊池庸介(国際共生教育講座)

① 研究の目的

本プロジェクトは、平成24年度学長裁量経費「福岡教育大学プロジェクト推進経費(研究支援プロジェクト)研究課題「教員養成課程の学生のための国際共生教育に関する共同研究」の継続研究を深化・拡大することを目的とした。今年度は平成24年度における研究成果を踏まえ、国語教育講座の日本近現代文学を専門とする申請代表者(久保田裕子教授)の他、共同研究者として日本語学(現代語)を専門とする杉村孝夫教授、日本語学(古代語)を専門とする勝又隆准教授の他、日本古典文学(近世文学)にも研究領域を拡大し、国際共生教育講座の菊池庸介准教授も参加し、教員を目指す学生に向けた国際共生教育に関する共同研究を行った。国語教育講座と国際共生教育講座という複数講座が連携することによって、教員養成課程の学生及び、生涯教育課程の学生の双方を対象とした国際共生教育を実施した。

② 研究の内容

平成24年度学長裁量経費・国際ワークショップ「教員養成課程の学生のための国際共生教育」(平成25年1月17日、福岡教育大学)では、講師として国際日本文化センター准教授・郭南燕氏(日本近代文学)、チチハル大学外国語学部日本語科副教授(日本語教育)を迎え、本学学生からは中等教育教員養成課程国語専攻4年生、初等教育教員養成課程国語選修4年生が研究発表を行った。グローバル化が進む現在、学校現場も国際化し、海外で活動するための基盤となる知見と体験の養成が求められている。「日本語や日本文学・文化を海外で学び、教える」をテーマに、国際的に第一線で活躍される外国人研究者を招聘し、日本文学・日本語学という文学・語学の両側面を見直す国際ワークショップを実施した。参加した学生からは海外における日本語・日本文学の研究に対して強い関心が示され、学生の発表に対しては講師からの高い評価を受けた。平成24年度の成果を踏まえ、平成25年度は本学の学生が教師となる上で必要な国際共生教育とは何かという問題について、日本語学・日本文学の両面から幅広く調査・研究を行い、国際共生教育に関する日中の学生の意識をアンケート調査によって比較研究した。さらに平成25年度も海外の若手研究者と共にワークショップを実施し、教員養成課程の学生及び、生涯教育課程の学生の双方を対象とした国際共生教育を行った。具体的には以下の内容である。

1. 平成23年度、24年度に実施した「国際ワークショップ」の成果の分析研究と研究成果の学生教育への還元を行った。
2. 複数の研究領域における研究成果を相互共有し、学内外に向けて成果を広く公表した。
3. 本プロジェクトの成果を踏まえて、科学研究費補助金の申請を行った。本プロジェクトの研究成果である上記の1、2を接合し、科学研究費補助金の申請に際して、より包括的かつ総合的な研究テーマへと発展させる基盤を構築するよう務めた。

③ 研究の方法・進め方

グローバル化が進む現在、学校現場も国際化し、海外で活動するための基盤となる知識と体験の養成が求められている。「日本語や日本文学・文化を海外で学び、教える」人々の言葉を受け止めることで、日本文学・日本語学という文学・語学の両側面の見直しの必要性が、前回のワークショップの実施と学生アンケートから確認できた。今回は学生と年齢の近い日本近代文学を学ぶ若い外国人研究者に講師を務めて頂き、学生とラウンドテーブルで討論を行った。教員志望の学生のために、国際的な研究の一端を知るためのワークショップを実施し、若いアジアの世代から見て、〈日本〉はどのように映っているかというテーマについて討論を行った。詳細は以下の通りである。

1. 「国際ワークショップ「教員養成課程の学生のための国際共生教育」
テーマ「日本から見た〈タイ〉、タイから見た〈日本〉」
2. 講師 トリラッサクルチャイ・タナポーン
九州大学大学院比較社会文化学府 博士後期課程3年生
チェンマイ大学人文学部東洋言語学科日本語科講師

3. 日時 2013年2月20日(木) 14時30分～16時10分
4. 会場 人文社会演習棟 人文社会講義室
5. スケジュール
 - 14時20分～14時30分 機材動作確認等準備
 - 14時30分～14時40分 ワークショップ開会のことば(本学教授・久保田裕子)
 - 14時40分～15時10分 タナポーン氏発表
 - 15時10分～16時00分 学生との質疑応答・討議
 - 16時00分～16時10分 ワークショップ閉会のことば(本学教授・杉村孝夫)
6. 講師プロフィール トリラッサクルチャイ・タナポーン氏は、タイ国立チュラーロンコーン大学日本語学科を卒業後、九州大学大学院に留学。2014年、学位論文「日本近現代文学におけるタイ表象の研究」(課程博士)取得。チェンマイ大学講師。

④ 実施体制

平成25年4月～平成26年2月の間、研究代表者の久保田裕子教授、研究協力者の勝又隆准教授、杉村孝夫教授、菊池庸介准教授の4名は随時研究テーマについて協議するとともに、役割を分担してワークショップの運営に当たった。

また教員養成課程の学生が教師となる上で必要な国際共生教育とは何かという問題について、語学・文学の両面から調査・研究し、その成果を基盤として学生の指導を行った。

1. 日本文学(近現代)、日本文学(近世)、日本語学(現代語)、日本語学(古典語)の研究内容について、それぞれ研究を行い、教員をめざす学生が必要とする国際共生教育について研究した。
 - 日本文学(近現代・久保田)…三島由紀夫・大庭みな子などの作品の海外における受容状況調査と分析研究。
 - 日本文学(近世・菊池)…江戸時代小説・説話等における海外の書物(とくに中国)の影響の研究。具体的には、「大岡政談」と中国の裁判小説の影響の確認、江戸時代小説の書き出し等に記される中国故事の典拠を明らかにする。
 - 日本語学(現代語・杉村)…日中の教員をめざす学生の国際共生教育に関する意識の対照的調査・研究。
 - 日本語学(古典語・勝又)…形式名詞述語文の構文構造に関する研究一言語の時間的変異に注目して一具体的には、古代日本語における「連体節+形式名詞(モノ、コト等)+ナリ/ゾ」という形式の構文の特徴を、他の類似の構文(「連体形+ナリ/ゾ」や係り結び構文など)と比較することで明らかにする。また、現代語の形式名詞述語文(モノダ文など)と対照することで、形式名詞述語文の古代語と現代語それぞれにおける位置づけや役割の差異についても考察する。
2. 異なる領域の共同研究を通して、日本語・日本文学研究における共同研究のあり方と方法論を共有し、その実践を行った。特に日本文学の近世・近現代の研究、日本語の歴史的・地理的変異の研究の成果を踏まえて、教員をめざす学生のための国際共生教育のあり方と方法論を分析・研究した。
3. 上記1・2の成果を踏まえ、学内外に研究成果の公表を行った。

⑤平成25年度実施による研究成果

1. 共同研究の成果を外国人研究者との共同討議を通して深め、学生の国際共生教育への意識を養うとともに、国際社会の中で必要なリテラシー能力を向上させることができた。
2. 得られた成果を学生への教育に還元することで、学生に対して「話せて当たり前」という日本語観からの脱却を促す効果が期待できることが、杉村教授のアンケート実施と分析結果により確認できた。
3. 獲得的資金に基づく研究成果を公開することで、社会への還元を行った。
各教員が研究・教育活動を行ったが、詳細は以下の通りである。

○久保田裕子(近現代文学)

1. 日本近代文学に描かれたアジア・欧米の表象を分析することを目的として研究を実施した。日タイ関係が緊密化した明治期以降に刊行されたタイ国を表象した日本文学テキストを調査・収集し、

それらの資料を基盤として、タイ国がイメージとして表象・流通した経緯について考察した。また日本文学テキストやタイ国で刊行された日本語の同時代資料の分析を通して考察し、日本におけるタイ国をめぐる文化表象の諸相について明らかにした。

成果発表としては、⑨の学会発表・講演・国内外における大学院生の指導を行った。国際的作家と呼ばれる三島由紀夫の国語教科書教材「復讐」について考察し、近現代文学と文学教育の問題にそれぞれ発表・講演を行った。さらに松本清張・大庭みな子・遠藤周作の作品について分析し、日本近代文学の作家の異文化の問題について発表した。教育的指導としては、学会における若手研究者ワークショップの指導助言、インドの国際交流基金ニューデリー日本文化センターにおける講演及び、日本文学を研究するデリー大学・ネルー大学の大学院生への指導助言を行った。また大阪大学・チュラーロンコーン大学の国際研究集会の発表内容について講評を行うなど、日本国内外で研究成果の公表および社会還元を行った。以上のように本プロジェクトにおける獲得的資金に基づく研究成果の学会・社会への還元を行うことができた。

- 2、共同研究の成果を外国人研究者との共同討議を通して公表し、学生の国際共生教育への意識を養うと共に、学生のプレゼンテーション・コミュニケーション能力を養成し、国際社会の中で必要なリテラシー能力を向上させることができた。

○菊池庸介（古典文学）

- 1、日本古典文学の源流の一つに漢文学の影響があるという事実をもとに、江戸時代後期の実録、『大岡仁政要智実録』を題材として、典拠とする『棠陰比事』との比較を行い、どのように典拠を改変して日本的な内容にしているのかを確認した。それによると、『大岡仁政要智実録』では舞台設定を江戸にし、江戸の具体的な地名を取り込んだり、当時の庶民生活に即した風俗描写を行ったりしていることが、主な特徴として挙げられる。なお、『大岡仁政要智実録』では、『棠陰比事』から本作にいたる間に別の作品（『本朝藤陰比事』『本朝桜陰比事』等）が存在するが、それらも合わせて比較し、同じ題材の話が変遷する様相をたどることができた。また、江戸時代中期の「儻偶物」と呼ばれる詐術を扱う浮世草子との関係を考慮する必要があり、この先の課題となっている。

授業においても如上の問題意識のもと、『大岡仁政要智実録』に加え、中国小説を翻案した江戸時代前期の小説『伽婢子』も扱い、学生には典拠である中国小説と読み比べさせた。学生たちにもまた、時代・場所・人物名や人物設定などが改変されるといった大まかなところから、翻案にさいしては和歌が巧みに用いられたり、仏教的な思想がうかがえたり、典拠の語句が効果的に用いつつ和語を織り交ぜていたりするというような細かな所に至るまで、それぞれの違いを考えさせることができ、同時に、典拠となった作品の良さ、日本古典の良さのそれぞれに気づかせることができた。

- 2、江戸時代中期の成立で、「会稽の恥」の故事による書名をもつ浮世草子『敵討会稽錦』の書誌的事項を調査し、巻2と巻3の部分については翻刻をした。作中に出てくる「下三連（あさんれん）」の語が、中国の詩学に用いられるものであることを調べるとともに、江戸時代中期における、武家社会での詩学の流行について考察を広げた。あわせて、江戸時代中期における唐話学の流行、それに連動した漢詩や白話小説の流行について、授業や学生有志のルーム研究会などで解説した。
- 3、古典文学における怪異譚のうち、怪異の起きるときの描写、中でも幽霊が登場する時の陰風に注目した。江戸時代以前の作品から、闇や悪天候は、怪異が起ころさいの、ひとつのパターンとでもいえるものであるが、風が吹いているだけの場合は、たとえば『雨月物語』の「菊花の約」のように、妖怪ではなく幽霊の出現する例が多くみられる傾向のあることがわかってきた。幽霊があらわれる時に吹く風については、中国の作品や思想との関係が想定でき、この問題については、もう少し中国の作品の例や日本の作品の例を集めて検討を加えていくつもりである。

○杉村孝夫（現代語）

「教員養成課程の大学に在学する学生を対象とした国際共生教育に関する意識についての日中比較アンケート」を平成14年2月中旬から3月初旬にかけて実施した。アンケートの対象学生は、福岡教育大学において国語を選修・専攻する初等教育教員養成課程および中等教育教員養成過程の学生（以下国語専攻と呼ぶ）と中国遼寧師範大学において日本語を専攻する学生（外国語学院日本語専攻、以下日本語専攻と呼ぶ）、中国の言語文学を専攻する学生（文学院漢語文学専攻、以下中文専攻と呼ぶ）

である。福岡教育大学では杉村孝夫が実施し、遼寧師範大学では外国語学院日本語科主任 リ・ウェイ教授の援助を得て実施した。

回答の得られた人数と所属は次のとおり。福岡教育大学国語専攻・選修学生 104人、遼寧師範大学外国語学院日本語専攻 102人、遼寧師範大学文学院中国言語文学専攻 92人。

アンケートの内容は、姉妹校の認知度や留学希望の有無などの他、これまでの学校教育や大学の教育の中で国際共生教育の実施について、これからの異文化間コミュニケーションや自己の文化の理解に関するもの、国際共生教育に対する個人の意識などである。

以下にアンケート結果の概要を記す。

姉妹校認知度は、福岡教育大学国語専攻の 20%に対して遼寧師範大学日本語専攻 74%、中文専攻 59%と、国語専攻が低い。

留学希望については、「希望あり」では国語専攻 47%、日本語専攻 48%、中文専攻 47%とほぼ同じだが、「希望なし」では、国語専攻 44%、日本語専攻 20%、中文専攻 40%で差があり、国語専攻が最も高い。

卒業後の教職希望は、どの専攻も高く、国語専攻 68%、日本語専攻 62%、中文専攻 74%で、中文専攻がやや高い。

項目 4 学校教育における国際共生教育の現状については、福岡教育大学の国語専攻は 53%が「不十分」と意識している。遼寧師範大学の日本語専攻、中文専攻では「行われている」が「行われていない」を上回っている。

項目 10 の大学の教育の中での国際共生教育の現状については、日本語専攻では「行われている」(36%)が「行われていない」(31%)より高いのに対して、国語専攻、中文専攻では「行われていない」方が高く、特に国語専攻の差が大きい。国語専攻 48% : 15%、中文専攻 43% : 28%である。

これに関連して、項目 12 国際共生に関する個人意識は、国語専攻「不十分」56%、「十分」12%、日本語専攻「不十分」43%、「十分」29%、中文専攻「不十分」46%、「十分」29%であり、国語専攻の「十分」が低い。

項目 5 これからの学校教育における異文化間コミュニケーション能力の養成、項目 6 自己の文化の理解の必要性では国語専攻・中文専攻は 8 割以上が「必要」を選択、日本語専攻は 7 割以上が「必要」を選択している。

項目 7 人権・福祉の思想の実現については、国語専攻が 16%とやや低く、日本語専攻 31%と中文専攻 33%は 3 割強である。

項目 8 人種・宗教などの対立は、国語専攻の「思う」を選択した割合(58%)が、日本語専攻(34%)、中文専攻(28%)に比べて高い。

項目 9 学校教育で基礎的な学力の養成を優先すべきかどうかについてはどの専攻も「思う」が「思わない」を大きく上回っている。

最後に、項目 11 異なった文化を持つ人々と触れあう機会が増えてきたと思うかどうかについては、どの専攻も「増えた」が「増えない」を上回っている。

福岡教育大学国語専攻・選修と遼寧師範大学の日本語専攻、中文専攻の学生の意識を比較すると、国語専攻・選修の学生は姉妹校の認知度が低く、留学を希望しない割合が高い。学校教育や大学での国際共生教育は「不十分」、「行われていない」が高い。また、国際共生に対する意識も「不十分」が高い。

当初、同じ日本語を専攻する福岡教育大学の国語専攻・選修の学生と遼寧師範大学の日本語専攻の学生の意識を比較しようと考えた。しかし、一方は母語の言語文化専攻であり、他方は外国語の言語専攻であるから後者が国際共生に関する意識は高いことが予想され、結果は予想通りであった。そこで同じ母語の言語文化を専攻する中文専攻の学生の意識についてアンケートも同時に行い比較した結果、中文専攻の学生の意識は、日本語専攻と国語専攻・選修の中間に位置するもの(項目 1 姉妹校認知度・2 留学希望・10 大学における国際共生教育・12 国際共生に対する意識)、だけでなく国語専攻・選修と日本語専攻より高いもの(項目 4 学校教育における国際共生教育・5 異文化間教育の必要性・6 自己文化理解の必要性)も見られた。

これらの意識についてのアンケート結果をふまえ、教員養成課程に在学する国語専攻・選修学生に対する国際共生教育のあり方について考えたい。

○勝又隆(古典語)

1、平成 25 年 8 月 8 日～9 日、第 250 回 筑紫日本語研究会、九州地区国立大学九重共同研修所「古代日本語におけるモノナリ文とモノゾ文の構文構造について」という題目で口頭発表を行った。

2、平成25年9月14日～15日、第63回 西日本国語国文学会（熊本大会）、熊本大学 くすの木会館

「古代日本語におけるモノナリ文と連体ナリ文の構造的差異について」という題目で招待発表として口頭発表を行った。

3、平成25年10月26日～27日、日本語学会2013年度秋季大会、静岡大学静岡キャンパス

「モノナリ文の特性とモノゾ文の「推量用法」という題目で口頭発表を行った。

4、平成25年12月28日、名古屋言語研究会例会（第118回）、名古屋大学

「ゾとナリの特性から見たモノゾ文・モノナリ文」という題目で口頭発表を行った。

以上の口頭発表は、古代日本語における「連体節+形式名詞モノ+ナリ/ゾ」という形式の構文の特徴を、他の類似の構文（「連体形+ナリ/ゾ」や係り結び構文など）と対照することで明らかにしようとしたものである。

その結果、以下の成果を得た。

(1) モノナリ文は主節の他、従属節において主に仮定バ節・確定バ節に現れ、ド節（逆接節）に1例のみ〈代用〉の例が観察される。また、モノナリ文は確言系の係り結び構文と共起し、モノゾ文は疑問詞疑問文と共起する。この2点とモノナリ文の諸用法から、モノナリ文は事態の全貌を把握した上で述べる、《知識表明》を前提とした構文であると考えられることを述べ、この特性がモノナリ文に「推量用法」が生じなかった理由であると結論づけた。

(2) 中古の両構文について、「モノナリ文は否定の呼応副詞と共起するが、モノゾ文は共起しない」「モノゾ文には「カナラズーム」や「イトーカシ」の呼応が見られるがモノナリ文には見られない」といった差異を指摘し、ド節への生起や「係り結び」との共起の増加と合わせ、モノナリ文とモノゾ文の差異は拡大していることを示した。

(3) モノゾとモノナリの、モノに上接する要素としてムとベシが相補的に分布する現象は、体言一般に言えることであることを確認した。このことから、ゾとナリの性質の違いが名詞の上接語の分布に反映していることがわかった。

(4) モノナリ文と連体ナリ文は、構文的特徴からは異なる構文と考えられる。しかし、ベキモノナリとベキナリが〈一般論〉を示すか〈個別・具体的な指示・教示〉であるかという観点から分析した結果、上代には両方に用いられていたベキモノナリが、中古に入ってベキナリが出現したことで、〈一般論〉はベキモノナリ、〈個別・具体的な指示・教示〉はベキナリが表すようになったことがわかった。構文的特徴のみに着目するのではなく、その表現内容にも注意を払うことで、変化の実態を正確につかめることを示した。

このような記述と対照は日本語そのものを客観的に見つめ直す作業である。古代語は日本語を客観視するのに適した題材であり、学生に対して「話せて当たり前」という日本語観からの脱却を促す効果が期待できる。

得られた成果は学生への教育に還元するために、学生への指導の際に簡略化した上で利用した。

⑥今後の予想される成果（学問的効果、社会的効果及び改善点・改善効果）

学問的効果としては、異なる領域の共同研究を通して、日本語・日本文学研究における共同研究のあり方と方法論を共有し、その実践を行った点にある。日本語・日本文学研究は、歴史的に個人研究の領域が多く、共同研究というスタイルを通じた学的訓練は確立されていない。その点が、共同研究を基盤とする科研費申請における難題の一つであった。杉村孝夫教授は、方言研究において長年にわたり共同研究者と共に遂行する研究方法を蓄積している。本プロジェクトの遂行を通して共同研究を行い、個人研究と共同研究を接合させる新たな研究方法を実践することが可能になった。

さらに学生教育における効果としては、教員養成課程の学生に対して今後一層重要な課題となる、学校現場における国際共生教育について、理論的な問題として学問的に考えるという契機となった。日本語・日本文学を研究する国際的に活躍される外国人研究者の講演を聞き、質疑応答の場所を作ることができた。アンケートの結果やその後の学生の言動からも、ワークショップは非常にインパクトのある経験であることがわかった。国際的に第一線で活躍される先生方の言葉を通して、学生たちに広い視野のもとに思考することの意味を再考させる契機となった。また外部の先生方から評価されることによって、学生たちが大きな自信を得たと考えられる。

⑦研究の今後の展望

今後とも「教員養成課程の学生のための国際共生教育」というテーマに係わるプロジェクトを継続して行いたい。学校現場においても、日本語を第一言語としない児童・生徒の増加など、国際化は重

要な課題である。そのような現場の問題に対峙するときに、教師自身がグローバル化した社会の中の言語文化の問題について、確固とした知見を持っていることが必要不可欠になっている。

⑧主な学会発表及び論文等

○久保田裕子

(口頭発表)

1. 「三島由紀夫「復讐」を読む—国語教科書教材としての小説—」、単独、2013年7月7日、日本文学協会第33回研究発表大会・国語教育部門(神戸大学)
2. 「日本文学協会 国語教育部会8月号合評会」、単独、2013年9月21日、日本文学協会国語教育部会(日本文学協会)
3. 「『霧の旅』第Ⅰ部・第Ⅱ部—場所の記憶」、単独、2013年9月27日、第10回大庭みな子研究会(東洋英和女学院大学大学院)
(社会貢献・講演)
1. 2013年5月26日 2013年度日本近代文学会春季大会
若手研究者ワークショップ・第二会場アドバイザー、法政大学外濠校舎
2. 2013年10月5日 遠藤周作文学館文学講座
「遠藤周作の描いたアジア—『王国への道—山田長政—』」講師
3. 2014年2月1日 国際交流基金ニューデリー日本文化センター
Japanese Studies Intensive Course
Japanese Modern Literature and Contemporary Literature 講師
4. 国際交流基金ニューデリー日本文化センター(1月30～2月1日)における学生指導
5. 講評 2014年3月28日 大阪大学・チューラーロンコーン大学第5回日本文学国際交流研究集会
大阪大学アセンブリー・ホール

○勝又隆

(学会発表・招待発表)

1. 平成25年8月8日～9日、第250回 筑紫日本語研究会、九州地区国立大学九重共同研修所
「古代日本語におけるモノナリ文とモノゾ文の構文構造について」
2. 平成25年9月14日～15日、第63回 西日本国語国文学会(熊本大会)、熊本大学 くすの木会館
「古代日本語におけるモノナリ文と連体ナリ文の構造的差異について」(招待発表)
3. 平成25年10月26日～27日、日本語学会2013年度秋季大会、静岡大学静岡キャンパス
「モノナリ文の特性とモノゾ文の「推量用法」」
4. 平成25年12月28日、名古屋言語研究会例会(第118回)、名古屋大学
「ゾとナリの特性から見たモノゾ文・モノナリ文」

○本報告書は、本学ホームページを通じて学内外に公開いたします。

○本経費により作成された成果物や資料等については、必ず全て添付願います。